



2016年12月17日から2017年3月5日まで、県立博物館では「蔵出し博物館」として、標記のチョウを展示する企画展を開催しています。今回は「収蔵庫にある標本をできるだけたくさん来館者に見て頂きたい」と思い、説明パネルを極力少なくして標本を並べてみました。展示室に一步踏み入れていただくと、88箱、479種、6726頭のチョウたちが、来館者をお迎えしています。

このように標本を展示していると、「同じ種の標本をたくさん作る必要があるのですか？」という質問をよく受け



企画展示室の様子

ます。そもそもなぜ標本を作る必要があるのでしょうか。「写真でも良いはず」と思う方もいるでしょう。今回は標本の持つ意味についてお話しします。

標本を残すことは『証拠』という意味でも重要です。その時、その場所には確かにこの昆虫が生息していた、ということは標本しか証明できません。標本を作り、採集日・採集場所・採集者のデータラベルをしっかりとつけて、それを保存することは科学的にも大切な作業なのです。博物館はその使命を担う機関でもあります。

次に、ある程度の数を並べてみると、それぞれの持つ違い＝変異を比べることができます。同じ地域でも差があるのか、地域ごとを比べると差があるのか、などは標本を並べて初めて気が付きます。これにより、地史的に日本に侵入したルートを推測する材料になったりします。

近年昆虫を採集する行為について、「自然を



同じ場所・同じ時期の変異

1973年にフィリピンで採集されたアルフェノールアゲハのメス。後翅に白斑の出る個体と出ない個体の違いがある。この地域におけるこの変異個体の割合は、今では異なっているかもしれない。

破壊する」という指摘がなされることがあります。確かに一部のマナーがない人たちが、クワガタムシを採るために木を切りたおしたり、朽ち木を丸ごと持ち帰ったりして自然を破壊する場合があります。また、普段は人が採集する程度で減ることがない昆虫ですが、極端に少なくなった状況下では採集によって絶滅の危機に瀕する場合があります。このような採集は行われるべきではなく、ルールと節度を持った採集を心がけるべきでしょう。



昆虫採集をする人もそうでない人も、自然が大好きな思いは変わりません。自然の中に隠された真実を一つ一つ解明していくことを楽しいと思うのも、ありのままの自然をそのまま眺めるのも、お互いに正しい自然とのつきあい方です。互いに認め合うような雰囲気を作られるように、標本を作る側からも情報を発信することが必要です。